歴史文化クラブ３１年５月研修会

「馬見古墳の主を求めて」

（馬見古墳群と新沢千塚古墳群を歩く）

１．実施日：５月１４日（火）・雨天決行

２．集合場所：近鉄・西大寺駅・南口

８：30　近鉄・西大寺駅・南口　出発

（生駒交通マイクロバス使用）

３．行程スケジュール

（出発）西大寺駅→（バス）河合大塚山古墳（徒歩で墳頂へ）
→（バス）馬見丘陵公園館（トイレ）（徒歩で）→ 乙女塚古墳
→　ナガレ山古墳 → 巣山古墳→（バス）三吉石塚古墳
→（バス）橿原市博物館 → 新沢千塚古墳群（散策）
→（バス）　西大寺駅　　（帰着予定時刻　17 時 30 分）

４．資料

①　馬見古墳の主（古川）
②　訪問先資料（坂東）
③　古墳について（坂東）
④　参加者名簿

奈良・人と自然の会
歴史文化クラブ

担当世話人：　坂東久平　　古川祐司
（事務局：中井弘　TEL 090-2381-1122）

歴文５月資料①

馬見古墳の主は誰か

By　古川

〈要約〉

・**馬見古墳群の大型古墳は、主として４世紀後半～５世紀に営まれた。**
・**北、中央、南の３つの古墳群からなり、それぞれが時系列的につながりを持っている。**
・**葛城氏の領域は、馬見丘陵全体にまで及ぶとする見解と、南の一部だけとするものがある。**
・**前者の立場によれば、中央群と南群は葛城氏ゆかりのものと想定するのが一般的である。**
・**北群の被葬者は大和政権の王族とするものと、これも葛城氏とする見解もある。**
・**６世紀以降の馬見丘陵は、「押忍坂王家」の勢力下にあったらしく、牧野古墳などの遺跡が見られる。**

≪忍坂王家の系譜：（敏達）―忍坂彦人大兄―舒明―天智・天武―高市皇子―長屋王≫

１、馬見丘陵の古墳・・・・・（馬見古墳群の地図）

馬見古墳群は、4 世紀後半から 6 世紀末に築造された古墳群である。前期・中期にかけて 250 基におよぶ古墳が、北群、中央群、南群に分かれて存在する。

（１）北群・・・・大塚山古墳群（5 世紀中～5 世紀後半）

馬見丘陵の最北端に位置し、高田川、葛城川、曽我川が大和川に注ぐ合流地点に 8 基の古墳がある。**中心となる川合大塚山古墳**（全長２１５ｍ　5 世紀中）は、１㎞ばかり東方にある「島の山古墳」（4 世紀中）と並んで、大和川水系の要所に位置する古墳群である。

（２）中央群・・・・巣山古墳群（4 世紀後半～5 世紀　および 6 世紀以降）

馬見丘陵の中央部東側に位置し、前期から後期までを含む馬見丘陵最大の古墳群である。

・**先行する佐味田宝塚古墳**（先方後円墳　4 世紀中）は、三角縁神獣鏡を含む３６面の銅鏡と、多くの副葬品が出土した。家屋文鏡、巴形銅器が有名。始祖的な首長の墓か。

・**中心となる巣山古墳**（4 世紀末/5 世紀始　２１０ｍ）は水鳥型埴輪、衣笠埴輪、木製の喪船（実物）が出土した大王級の首長墓。この後の新木山古墳（5 世紀・前）、倉塚古墳（5 世紀・中）と大型古墳が 5 世紀中頃まで続く。ほかにも、中小の前方後円墳、国内最大級の帆立貝式墳などを従えて、当時の盛んな勢力を物語っている。

・**終末期の牧野古墳**（直径６０ｍ）は終末期の大型円墳。県下でも第 3 位クラスの大型石室を持つ。敏達大王の皇子、忍坂彦人大兄の墓（成相墓）と考えられている。

（３）南群

馬見丘陵の南端には、前期後半の新山古墳ほか中小古墳がある。丘陵の南端地点の先の丘陵に、一連の築山古墳群がある。

・**新山古墳**（4 世紀中　１２６ｍ）は**前方後方墳**で、馬見丘陵で最古の古墳である。

竪穴式石室から、**34 枚の銅鏡**を含む多数の副葬品が出土（宮内庁所蔵）、中でも、西晋のものと見られる**帯金具一式は、**年代決定に重要な手掛かりとなった。前方後方墳という形式を含めて、

巣山古墳群の先駆的な古墳と考えられる。

・**築山古墳**（5 世紀中　２０９ｍ）

築山古墳は陵墓参考地。南群最大の前方後円墳である。これに続く大型古墳としては、「狐井城山古墳」（5 世紀末/6 世紀初）がある。これを最後として、馬見丘陵に有力な古墳は営まれなくなる。

２、馬見古墳と葛城氏について

（1）古代の「葛城」の範囲をどう見るか・・・・大葛城説と小葛城説

・大葛城説

従来の通説では、律令以前に葛上・葛下の名称があり、その間の忍海郡を加えた地域、すなわち葛城川が大和川に合流するまでの地を指すとする。（森浩一、岸俊夫、白石太一郎、門脇禎二の各氏）

・小葛城説

葛城の宮号を持つものや延喜式内社で「葛木」を冠する神社は、金剛・葛城山麓から二上山麓に及ぶ範囲に限られるので、葛城氏の本拠は葛上郡南部の掖上とその周辺であり、馬見古墳群はその南端部がかろうじて葛城の範囲に含まれるにすぎない。（和田萃氏）（橿考研：図録「馬見丘陵の古墳」）

（2）馬見古墳の被葬者は？

葛城の領域の解釈をもとに、さまざまな解釈がなされている。以下に主なものを紹介する。
なお、個別の被葬者を特定するには、あまりにも文献資料が乏しくほとんどが推測の域を出ない。
とくに興味のある人は、近刊の小笠原好彦氏「古代豪族葛城氏と大古墳」など参考にされたい。

①森浩一氏の説　・・・従来の通説的な考え

馬見古墳群は柳本古墳群より規模の大きな古墳群であり、新山古墳・佐味田宝塚古墳・巣山古墳など前期から中期に築造された古墳群であること、畿内の多くの大古墳群が「記紀」「延喜式」などに記されている**陵墓**を含むのに対して、馬見古墳群は、そのような伝承が全く伝えられていない。**この地域は古代文献に記す葛城国であると考えれば葛城氏の墓とみなしうる可能性が高い。**

②和田萃氏の説　・・・通説に対するは反対意見

・葛城氏の本貫地は、**南葛城の宮山古墳から北に広がる秋津の地一帯を想定するのが妥当でありこの馬見丘陵の大型古墳との直接の関連は想定しにくい**。むしろ柳本古墳群や佐紀盾列古墳群と同じように、大和政権に直接関わる古墳と考えた方がいいだろう」

・馬見古墳群の巨大な古墳では、副葬品は豪華なもので、単に一氏族の奥津城とは見做しがたい。むしろ柳本・佐紀・古市・百舌鳥古墳群などとともに、**大王家の一族にかかわるものとみなすべきである。**

③門脇禎二氏の説　・・・　和田萃説に対する反論　「葛城と古代国家」より

・**襲津彦以前の葛城の首長とその一族の動向からみると、四世紀に遡る葛城氏とそれに関連する大型古墳は、葛上郡にはまったく築造されていない。**したがって、馬見丘陵に築造された四世紀代の

古墳は、葛城氏のものと考えざるをえない。

・葛城襲津彦の後裔には、蘆田宿祢と玉田宿祢の流れがあり、このうち**葦田宿祢の葦田の地名は、馬見丘陵の中央部の佐味田宝塚古墳の南西 400m の地に葦田の地名**があり、ここに孝徳天皇の父の「片岡蘆田墓」があるので、葛城の本拠は馬見丘陵一帯を含むものであったとみなされる。（なお、玉田宿祢の玉田は、玉手とのつながりから（御所市玉手）葛城盆地に見いだせる）

④白石太一郎氏の説　・・・・　　「古墳とヤマト政権」

・葛城の範囲は、**葛上郡・忍海郡・葛下郡・広瀬郡の４郡である。そこには有力首長による「葛城連合」ともいうべき地域政治連合**があった。島の山古墳を含めて、4 世紀～5 世紀に造営された２００ｍ級の大型古墳は、大和川の河川交通の要衝を占め、激動する国際情勢にあって大和王の中で、対外政策に役割を果たした「葛城連合」の盟主の墓と考えるべきである。

３、葛城宗家滅後の馬見丘陵

葛城氏本流として葛城盆地で大いに栄えた玉田宿祢の系統は、5 世紀後半に円大臣が雄略天皇との政治抗争に敗れて葛城宗家は断絶する。一方、馬見丘陵一帯を本願とする葦田宿祢の系統は存続したとも考えられる。

雄略大王が薨去（789 年？）すると、次の清寧大王に子が無かったため、葛城の血をひく**顕宗・仁賢・武烈が大王として登場する。**

（１）飯豊皇女

葛城荑媛を母とする飯豊皇女は、清寧天皇の死後、馬見丘陵地域南端にあたる忍海角刺宮で国政を執ったとされる。その陵墓（埴口墓）の**北花内大塚古墳**（葛城市北花内）にある。

（２）顕宗天皇、武烈天皇

葛城荑媛の子、顕宗天皇、孫の武烈天皇の陵墓も、『日本書紀』によれば馬見丘陵地域にある。**「傍丘磐坏丘南陵」、「同北陵」（香芝市）**がこれである。

４、６世紀以降の馬見丘陵地域

葛城系の大王は、武烈天皇で途絶えるが、武烈の姉の手白香皇女が継体大王の大后となり、葛城氏の血筋は、欽明―敏達へと受け継がれる。蘇我氏系の大王（用明―崇峻―推古）の時代の間も、馬見丘陵一帯は、**非蘇我系の押坂王家の勢力下にあった**ものと推定される。

（注）

・（敏達天皇）―忍坂彦人皇子―舒明・・・―天智―天武へとつながる一族を、彦人大兄皇子の主要拠点であった押坂（桜井市忍阪）に因んで「押坂王家」と呼ぶ。

・『延喜式』諸陵寮には：

成相墓（ならひのはか）。押坂彦人大兄皇子。在大和国廣瀬郡。兆域東西廿五町。南北廿町。守戸五烟」とある。記載のとおりとすればその規模は日本最大の大仙陵古墳（同じく『延喜式』）の兆域の 10 倍以上の広さがあったことになる。

・墓陵には現在の奈良県広陵町の牧野古墳を推定する。 押坂彦人大兄皇子伝来の私領は「皇祖大兄御名入部」と呼ばれ、以後も息子である舒明から孫の中大兄皇子（後の天智　天皇）らへと引き継がれて、大化の改新後に国家に返納されたと考えられており、彦人大兄の死後においても、**皇子の系統が蘇我氏や上宮王家に対抗して、舒明即位から大化の改新の実現を可能にしたのは、こうした財政的裏付けの存在があったからだ**と言われている。

①押坂彦人大兄皇子の墓　牧野古墳

押坂彦人大兄は、武烈天皇が開発した水派邑に宮室をいとなみ（水派宮)、その成相墓（ならいのはか）は馬見丘陵内の**牧野古墳**にあてるのが定説である。牧野古墳は直径６９ｍの大円墳で、奈良県でも屈指の規模の横穴式石室をもつ。

②馬見丘陵地域の押坂王家の遺構　・・・・天智天皇・天武天皇から高市皇子、長屋王へ

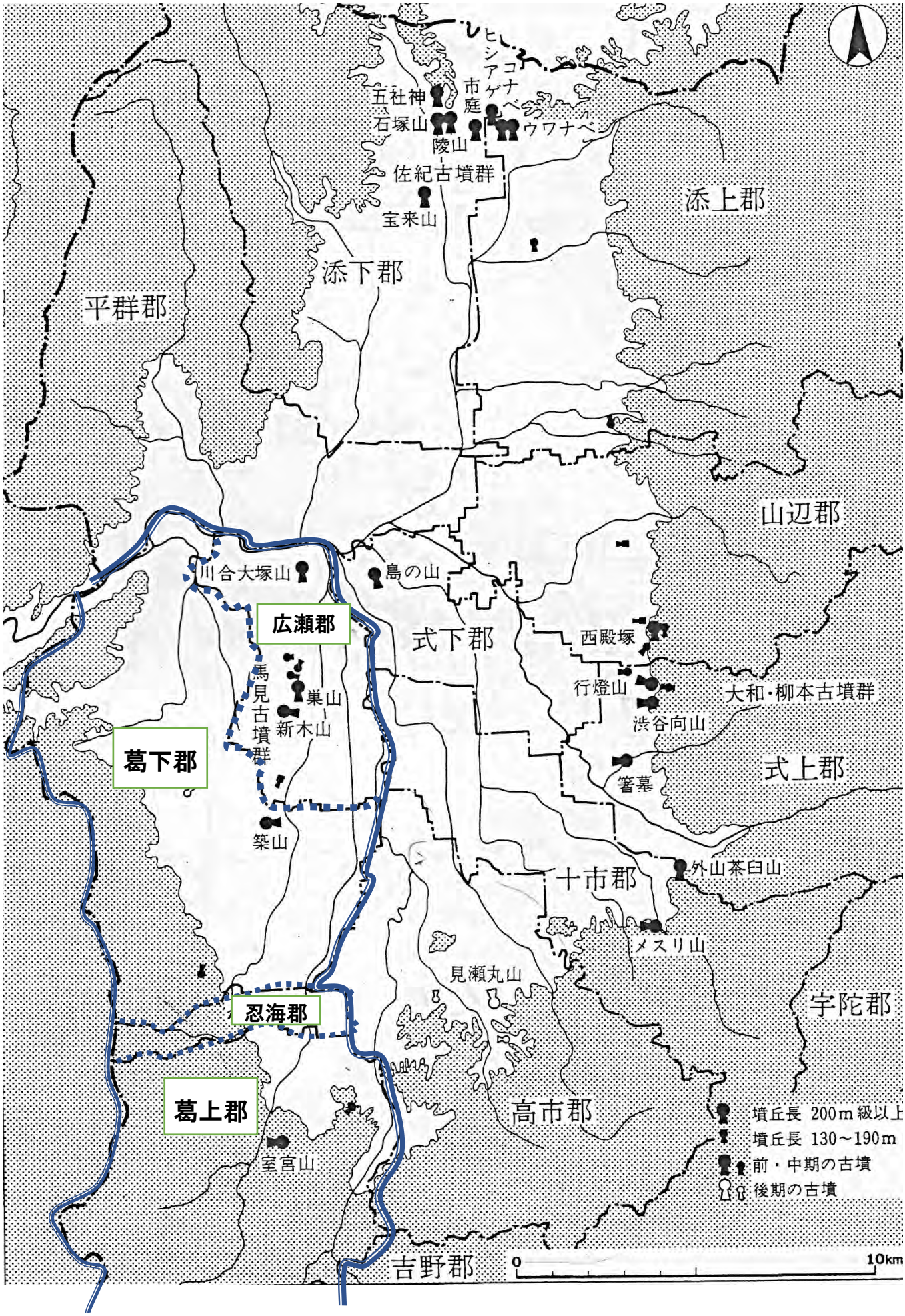
・片岡王寺　　寺の創建者の糠手姫皇女は、押坂彦人大兄皇子の妻で、舒明天皇の母である。
・茅渟王墓　　押坂彦人大兄の子、茅渟王の墓「片岡葦田」は平野塚穴山古墳とされてる。
・広瀬荘　　広瀬荘は馬見丘陵の南部から東南にかけて存在した弘福寺（川原寺）の荘園。弘福寺は、天智天皇が母の斉明天皇のために建てた寺院。「押坂彦人大兄皇子→舒明天皇→天智天皇」と相続された領地が、弘福寺に施入されたものと見られる。
・広瀬宮　　天武天皇の馬見丘陵地域の離宮。近くの片岡・木上の天武の領地があったらしく、子の高市皇子、孫の長屋王へと受けつがれた。
・三立岡墓　高市皇子の葬儀は城上（キノへ）で行なわれ、墓は「三立岡墓」、広瀬郡「三立丘は、広陵町の「見立山近隣公園」がそれにあたる。

以上見てきたように、馬見丘陵地域の歴史は、葛城氏没落のあとに王族たちがこの地に進出し、押坂王家の勢力基盤となった。葛城南部は蘇我氏の影響の強かったが、馬見丘陵地域はやや異なった古代史をたどったのである。

（この項は、吉川真司氏「葛城氏のあとにー馬見丘陵地域の古代史」を参考にした）

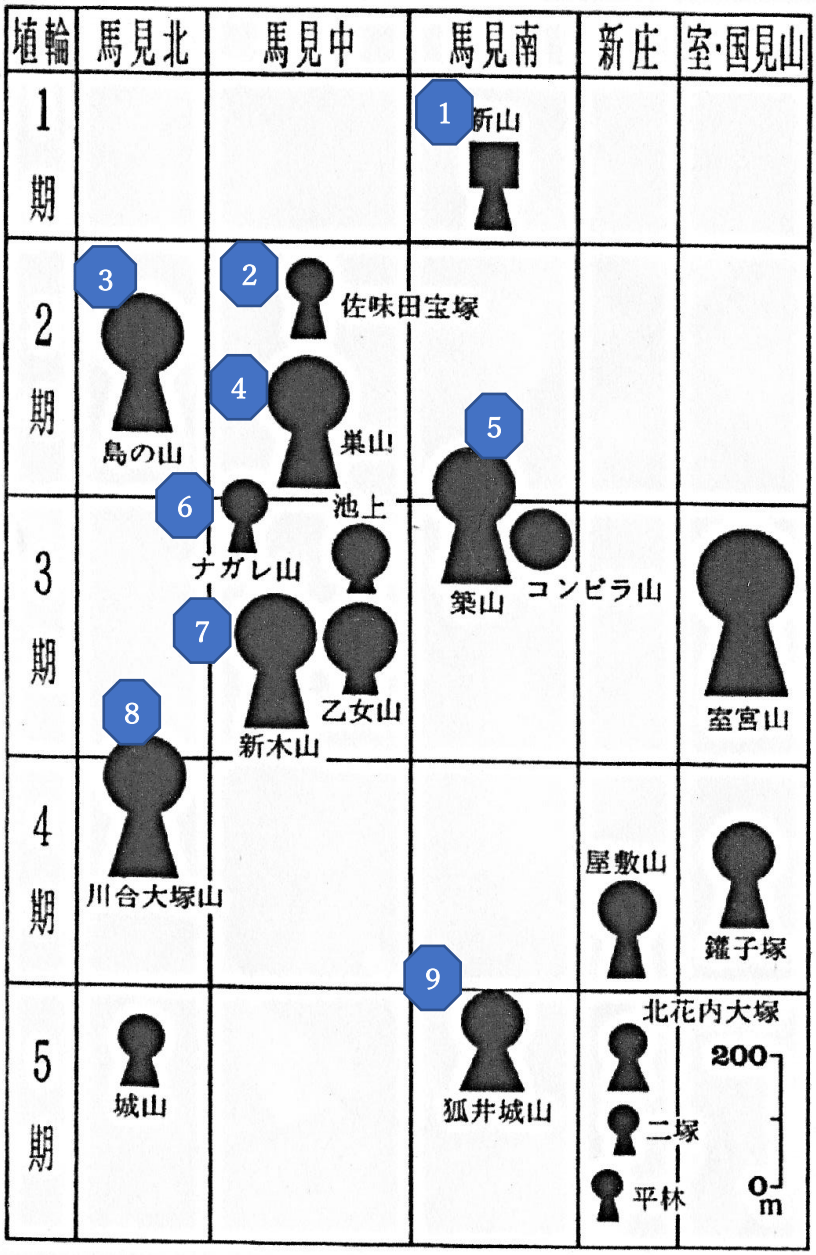
以上

付表Ⅰ　**葛城の範囲**　（奈良盆地の旧郡域と大型古墳の分布より）

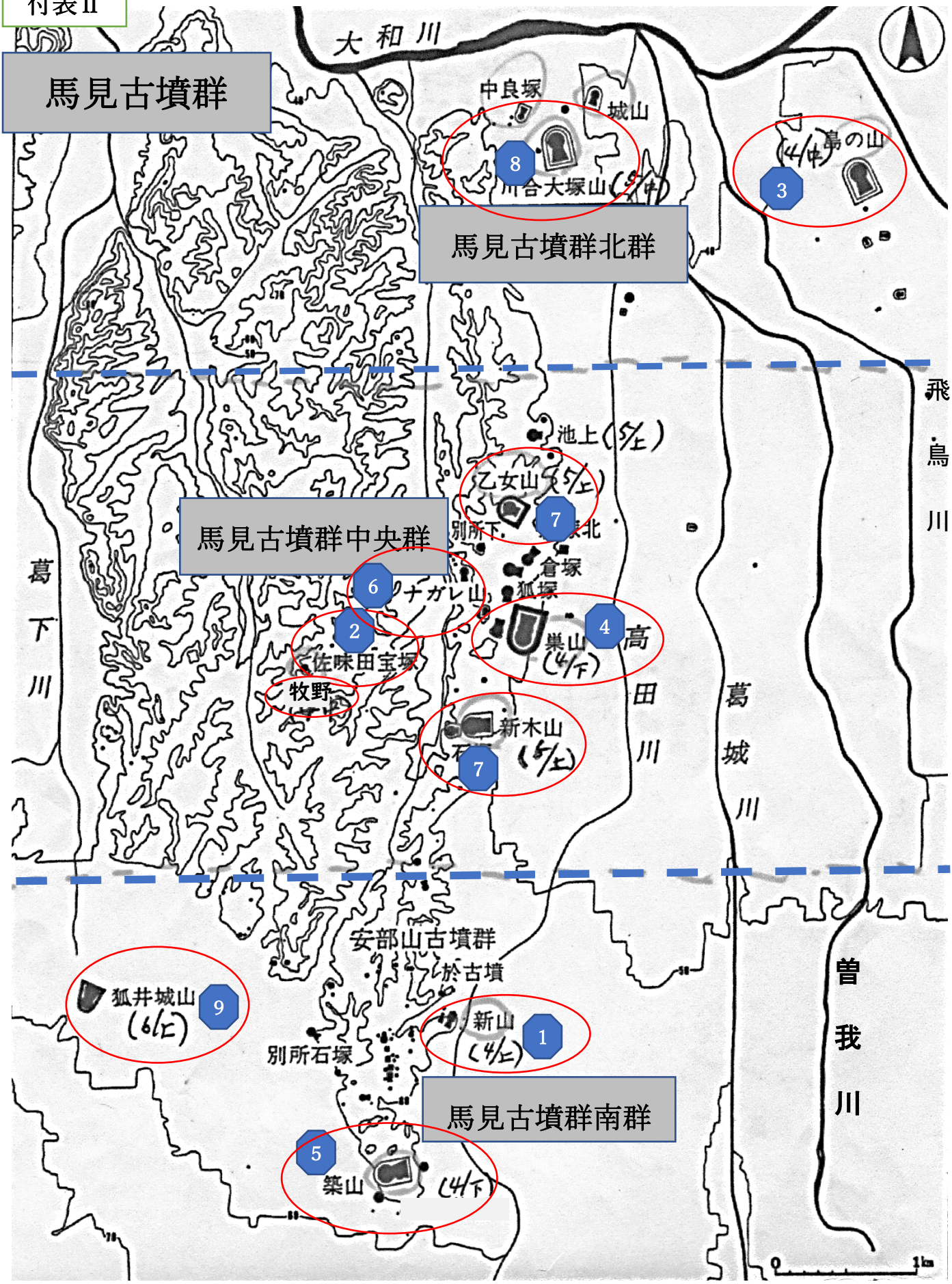


葛城地区の古墳編年表

（白石太一郎氏講義資料より）

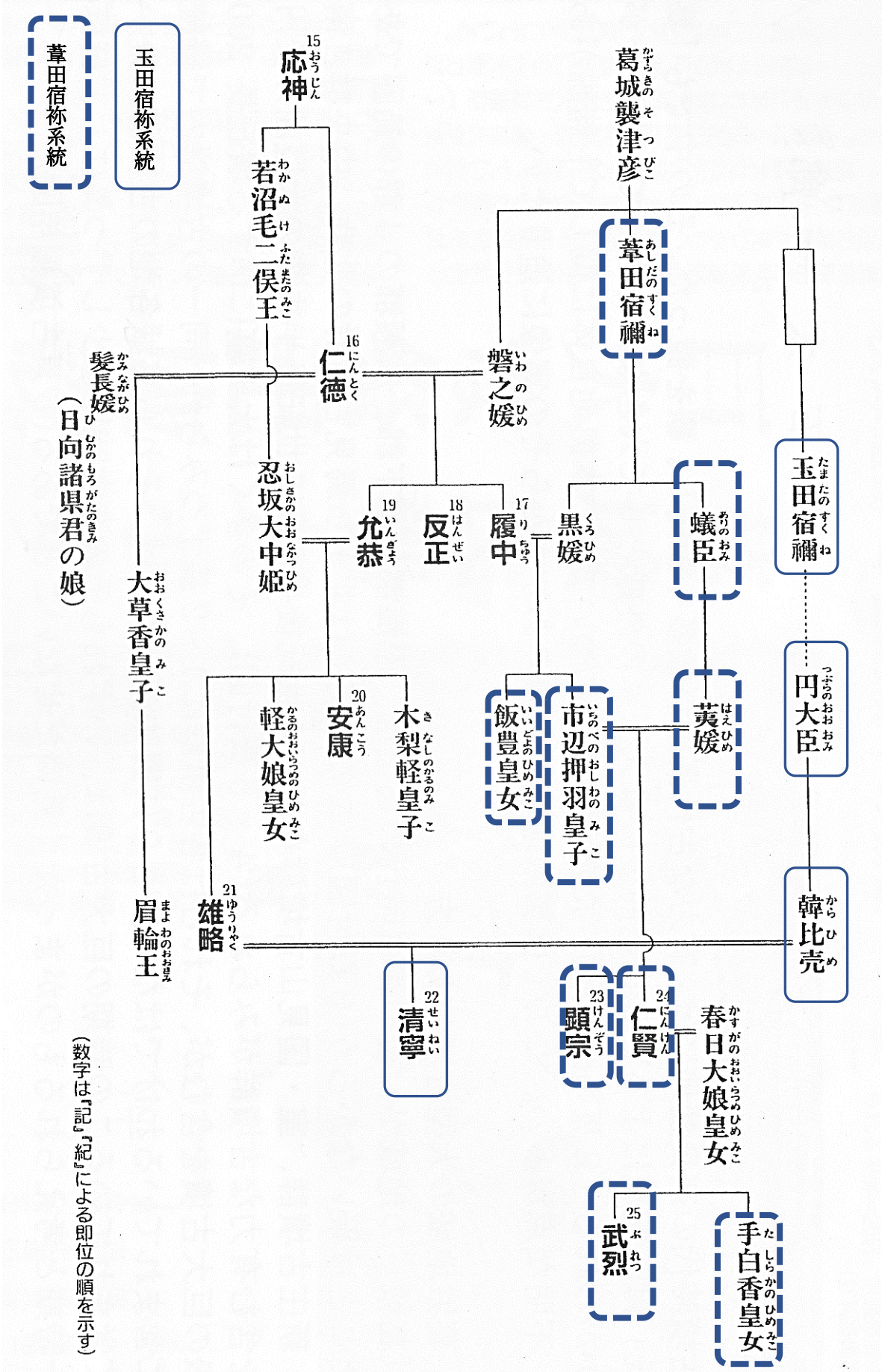


付表Ⅱ


馬見古墳群
馬見古墳群北群
馬見古墳群中央群
馬見古墳群南群
大和川
中良塚
城山
川合大塚山
島の山
池上
乙女山
別所下
倉塚
狐塚
ナガレ山
巣山
佐味田宝塚
牧野
新木山
安部山古墳群
於古墳
新山
別所石塚
狐井城山
築山
葛下川
高田川
葛城川
飛鳥川
曽我川
1
2
3
4
5
6
7
8
9

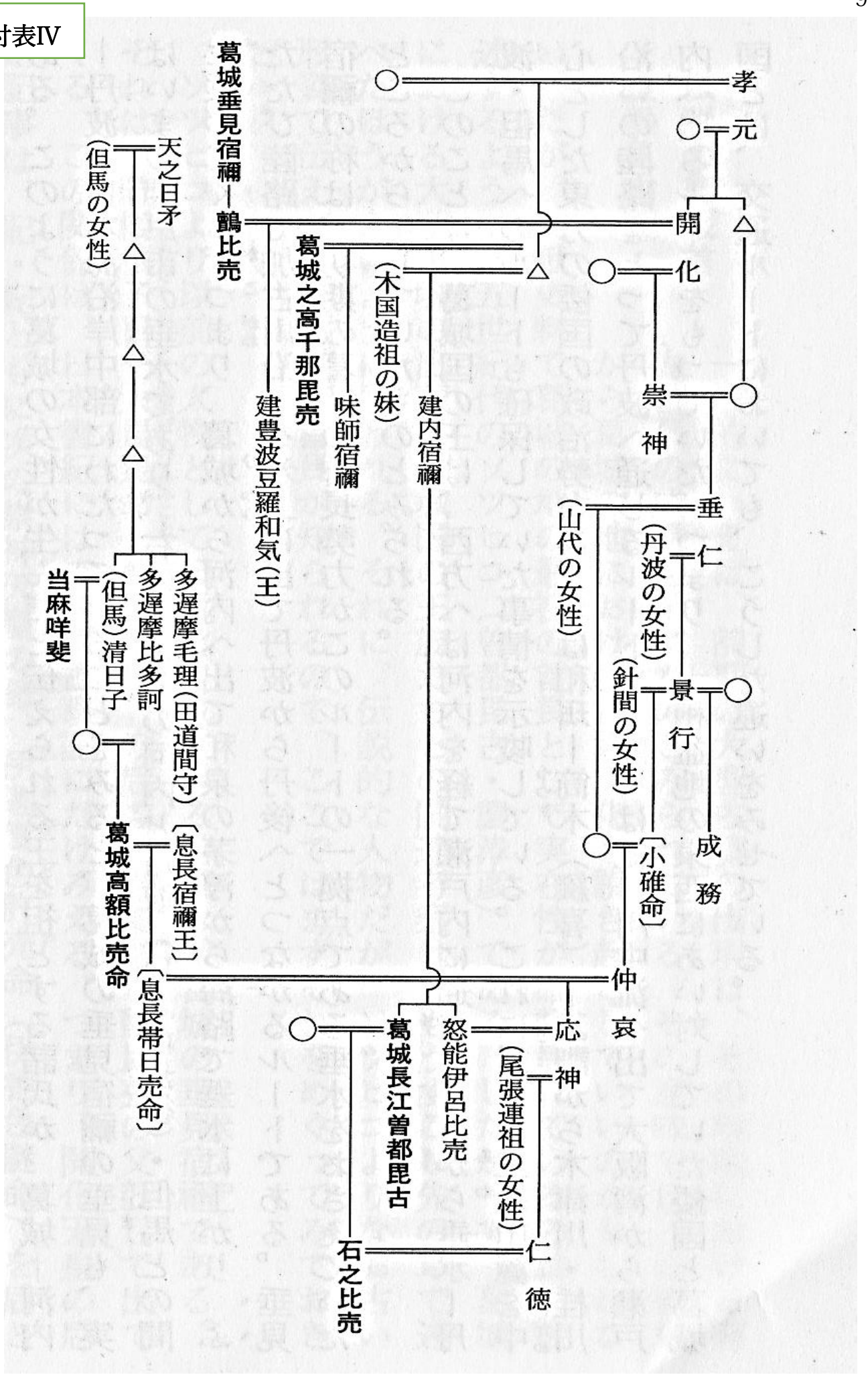
付表Ⅲ

大王家と葛城氏



（数字は『記』『紀』による即位の順を示す）

付表Ⅳ


孝元
開化
崇神
垂仁
景行
成務
葛城垂見宿禰
鶴比売
葛城之高千那毘売
建豊波豆羅和気（王）
（木国造祖の妹）
味師宿禰
建内宿禰
（山代の女性）
（丹波の女性）
（針間の女性）
〔小碓命〕
仲哀
応神
（尾張連祖の女性）
仁徳
怒能伊呂比売
葛城長江曽都毘古
石之比売
天之日矛
（但馬の女性）
多遅摩毛理（田道間守）
多遅摩比多訶
（但馬）清日子
当麻咩斐
〔息長宿禰王〕
葛城高額比売命
〔息長帯日売命〕

歴文５月資料②

訪問先資料

ｂｙ　坂東久平

（参考文献：橿考研友史会遺跡地図）

１．河合町文化財展示室

河合町で発掘された埋蔵文化財を展示しています。
九僧塚古墳の発掘、馬見古墳群出土品（ナガレ山古墳出土の埴輪など）以外に、長屋王邸の瓦、長林寺関連など。
写真やレプリカでしか見ていない、本物の円筒埴輪にお目に掛かれます。

２．馬見古墳群

馬見丘陵は、奈良盆地の西で南北にのびる低丘陵（南北 7km、東西 3km 比高約 25m）の長円形である。 古墳郡は 4 世紀後半から 6 世紀末葉に及ぶ大小約 1000 基に及ぶ。
これらの古墳は大きく３つに分けて、北群、中央群、南群とされるが、別個のものとされている。この中で、最大規模の**巣山古墳**（前方後円墳）は全長約 220m に達する。
北群は、5 世紀後半から 6 世紀前半で、廣瀬神社の所領地にあり、この地を治めていた豪族の墓と考えられる。
中央群は、4 世紀後半から 5 世紀前半で、葛城氏又は大王家にかかわるものと考えられ、**巣山古墳→ナガレ山古墳→乙女山古墳**の順に築造されたとされる。
南群は、5 世紀から 6 世紀前半で、葛城氏又は大王家にかかわるものであろう。

（主な古墳）

川合大塚山古墳

5 世紀中葉の前方後円墳。三段築成、全長 215m、後円部径 108m、高さ 16m、周濠をめぐらし、円筒埴輪列が認められた。形の美しい古墳で、墳頂に明治天皇駐蹕の石碑がある。

乙女山古墳（おとめやまこふん）

5 世紀前半の帆立貝形古墳。全長約 130m、後円部高さ約 14.7m。後円部の西側に幅 24m、長さ 10m の造り出しがある。（規模は全国 2 番目）
《日本最大の帆立貝形古墳は、**男狭穂塚古墳**（おさほづかこふん）で、
全長約 175m、後円部高さ約 18m（宮崎県西都市の西都原古墳群）》

ナガレ山古墳

5 世紀前半の前方後円墳。後円部は三段、前方部は二段に築成、全長 105m、後円部径 65m、高さ 8.75m、前方部幅 70m、高さ 6m。東側半分が築造当時の姿に復原されており、貼り石や円筒埴輪（レプリカ）が築造時の偉容を見せている。

巣山古墳

4 世紀末～5 世紀初めの前方後円墳、馬見古墳群の中で最大級の規模を誇る。
全長約 220m、後円部径約 130m、前方部幅約 112m。陵墓には指定されていないが、大王級の墓と考えられる。
張出部からは死者の霊を運ぶとされる水鳥形埴輪、権威を象徴する蓋（きぬがさ）の埴輪などの形象埴輪が出土した。平成 20 年には、周濠から被葬者の遺体を実際に運んだと考えられている実物大の木製「喪船」が見つかっている。

三吉石塚古墳（みつよしいしづかこふん）

5 世紀後半の帆立貝形古墳。全長約 45m、保存整備が終わり、貼り石や円筒埴輪の状態が築造時の様子を再現している。

新木山古墳（にきやまこふん）「三吉陵墓参考地」　（三吉石塚古墳から展望）

5 世紀前半の前方後円墳、全長約 200m、後円部径約 117m、前方部先端の幅約 118m。

周濠、外堤、造り出しを持つ点で巣山古墳と共通するが、前方部が開き、若干高くなっている事から、巣山古墳に後続する古墳と考えられる。

新山古墳（しんやま）「大塚陵墓参考地」（被葬候補者：第 25 代武烈天皇）

4 世紀中頃の**前方後方墳**、全長約 137m、南群の中で最初に造営された大規模な古墳。

後方部中央に竪穴式石室があり、箱式石棺があった。出土品の多くは宮内庁に収蔵されているが、三角縁神獣鏡 9 面、直弧紋鏡 3 面を含む 34 面の鏡などと、金銅製金具、玉類、石製品などがあり、他に類をみない豊富な副葬品構成となっている。

佐味田宝塚古墳（さみたたからづか）：**今回は訪問できませんが、重要な古墳です。**

初期に造営された古墳の一つで、4 世紀中葉から後半の全長約 110m の前方後円墳。
後円部から、36 面の鏡や石製品が出土し、ひれ付き円筒埴輪の列も確認された。
鏡の中に、貴重な**家屋文鏡**が発見され、これは国内唯一のものである。

古墳群のうち、サイズの大きいものを選択した。＊**太字記載の古墳**を見学します。

北群：**河合大塚山古墳**（215m）、河合城山古墳（109m）
中央群：**乙女塚古墳**（130m）、**巣山古墳**（210m）、**ナガレ山古墳**（103m）、
一本松古墳（130m）、**三吉石塚古墳**（45m）
新木山古墳（にきやま）（200m）「三吉陵墓参考地」
（被葬候補者：第 30 代敏達天皇皇子・押坂彦人大兄皇子・舒明天皇御父）
南群：**新山古墳**（しんやま）（137m）「大塚陵墓参考地」（被葬候補者：第 25 代武烈天皇）
築山古墳（つきやま）（209m）「磐園陵墓参考地」（被葬候補者：第 23 代顕宗天皇）
狐井城山古墳（きついしろやま）（140m）

３．新沢千塚古墳群　（博物館の観覧後に時間の許す範囲で散策します）

新沢千塚古墳群は、2km 四方の丘陵に 4 世紀後期から 6 世紀後期の古墳約 600 基が集中し、直径 10～20m の小規模な円墳が大半を占めている。

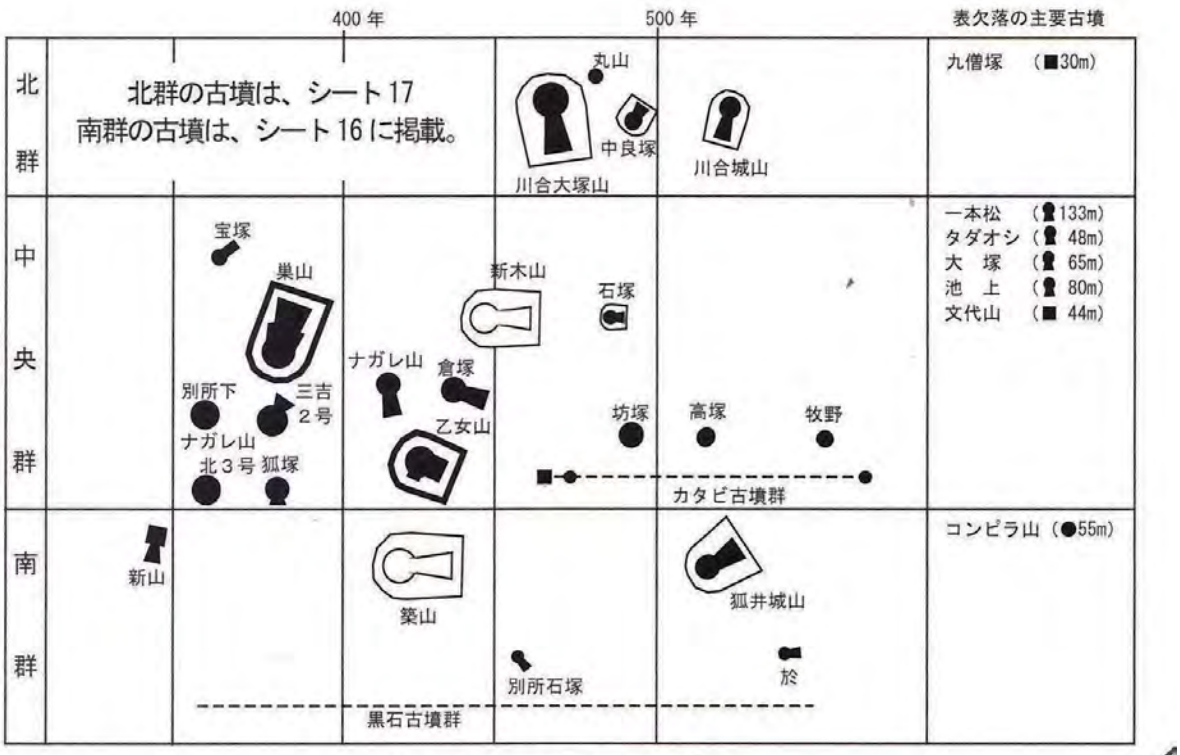
この中の、126 号墳（5 世紀後半の長方形墳：東西 22m、南北 16m）から金銀の装飾品や青色ガラス皿が出土した。

被葬者は不明で、古墳のサイズに釣り合わない出土品から、高貴な方と推定されている。
百済王朝の末裔との説もある。

４．橿原市博物館（観覧料：300 円）

新沢千塚古墳群についての解説や古墳出土品が展示されています。
この中の、126 号墳から出土した金銀の装飾品（国重文：展示はレプリカ）や青色ガラス皿はとても美しいものです。
学芸員の説明を聞いた後、古墳を散策します。

（馬見古墳群の編年表）



坂　靖　氏による編年案

喪船

円筒埴輪

水鳥

蓋（きぬがさ）

5月研修会資料　　ｂｙ坂東久平

古墳について

１．お墓と古墳

縄文時代には、お墓は住居の中もしくは住居区域の中にあったとされる。この時代は、基本的に家族単位の集団で生活をしており、定住をしていない。従ってムラ長はいない。
（例外として、三内丸山遺跡は、縄文時代前期中頃から中期末葉の大規模集落跡である。ここでは、集団で、堅果類（クリ、クルミ、トチなど）や一年草の植物（エゴマ、ヒョウタン、ゴボウ、マメなど）を栽培しており、環状配石墓（ストーンサークル）はムラ長の墓と考えられている。）

弥生時代になると、水田が主体の集落での定住生活になり、集団（ムラ）を纏めるムラ長が現れる。ムラ長の墓は特別に造られるようになる。

弥生時代（紀元前5世紀～紀元3世紀）（近畿では紀元前3世紀～紀元3世紀）に、ムラが発生しそれが統合、巨大化して行きます。初期に方形周溝墓、方形台状墓、円形周溝墓が出現し、後期には円形台状墓に変化する。

２．墓から古墳へ

吉備で楯築（たてつき）遺跡（2世紀後半～3世紀前半に造られた双方中円墳）、出雲に四隅突出型弥生墳丘墓が現れ、各地でその地域を統率する首長（豪族）が首長専用の大きな墳墓を造る。

円墳、方墳などが出現し、次第に大型化して前方後方形周溝墓、纒向型前方後円墳を経て、2世紀末に最初の前方後円墳：箸墓古墳（278m）が誕生する。

図１：弥生から古墳時代の墓

３．古墳の変遷

古墳は、単なるお墓ではありません。時の権力者の権威の象徴であり、後継者が正当性を主張する場であったと考えられている。

古墳時代（3世紀～6世紀）には、円墳、帆立貝形前方後円墳、前方後円墳などが造られるが、身分の格差に応じて古墳の形や大きさ、埴輪の種類などが異なる。

図２：「古墳編年」（白石太一郎：201306補訂）はこのような要素を加味して作成されている。

大型の前方後円墳は大王クラスの人だけに許されたもので、3世紀の箸墓古墳に始まり、6世紀の五条野丸山古墳（欽明天皇陵：宮内庁は梅山古墳）を最後としている。

これ以降は方墳や八角墳に変わり、8世紀の奈良時代には円丘（聖武天皇陵など）になり、天皇陵は現在も円丘の形である。

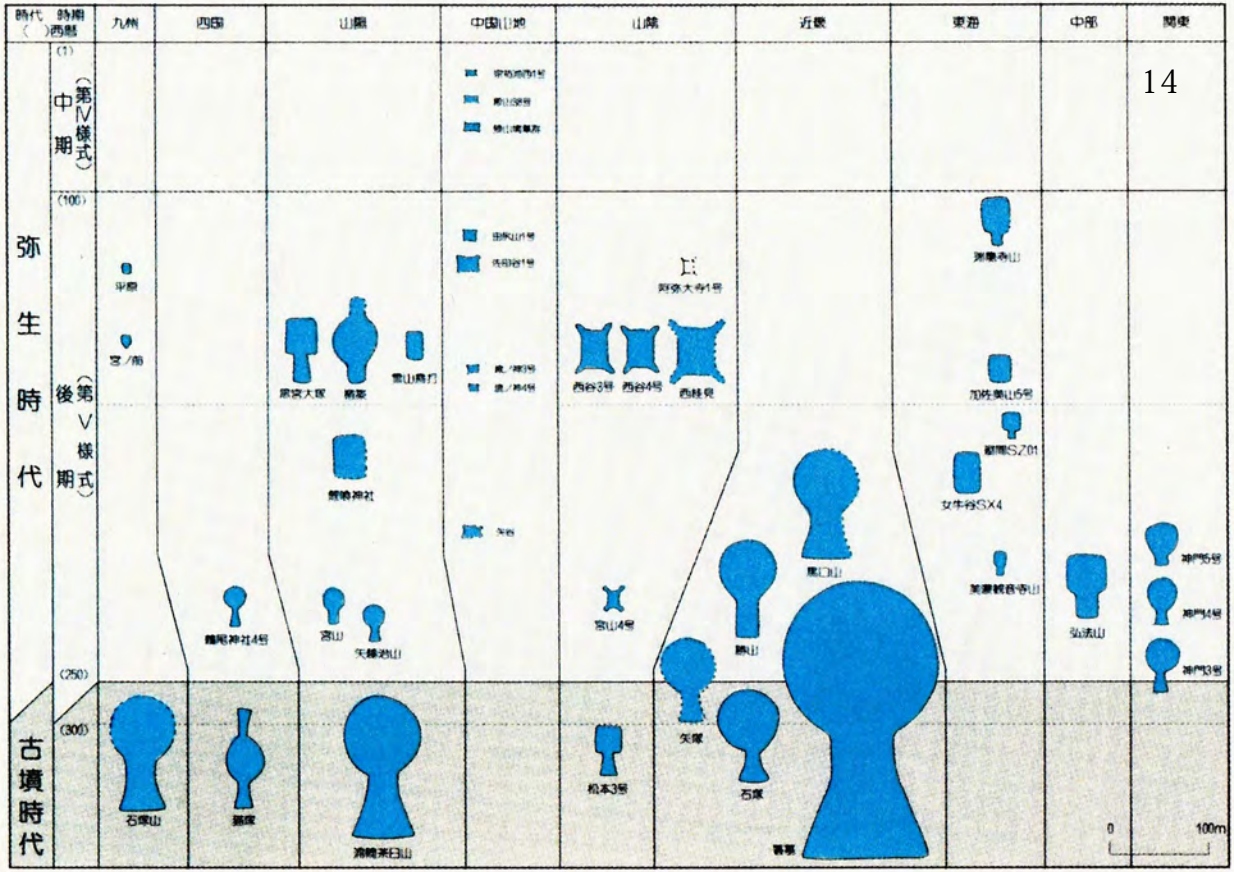
八角墳は規模が小さくても、権威を保つため一般の古墳と異なる形としたとされる。

図３：天皇陵と八角墳

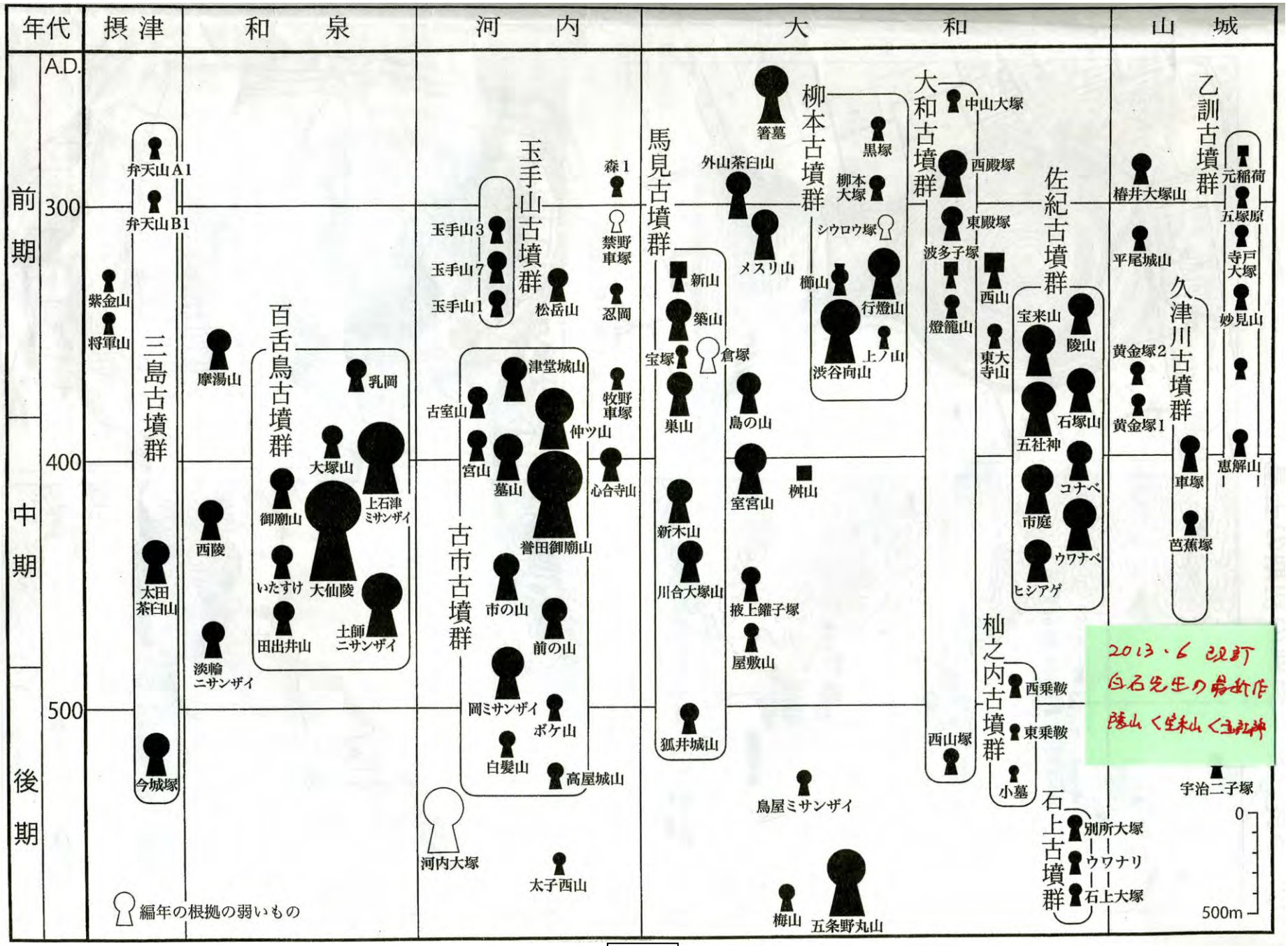
（主な八角墳）

段ノ塚古墳（舒明天皇陵）、山田上ノ山古墳（孝徳天皇陵）、
牽牛子塚古墳＆岩屋山古墳（斉明天皇陵と推定）、御廟野古墳（天智天皇陵）、
野口王墓（天武・持統陵）、束明神古墳（草壁皇子と推定）、中尾山古墳（文武天皇陵と推定）

以上



各地の弥生時代から古墳時代の墓（安藤広道 1995『弥生の“いくさ”と環濠集落』横浜市歴史博物館原図、伊藤実1995『古墳誕生の謎をさぐる―特殊器台からはにわへ―』広島県立歴史民俗資料館転載）



畿内における大型前方後円墳の編年《2013年6月補訂》

図 1

歴代天皇の御陵と古墳の関連

古墳名	叡福寺北	五条野丸山	梅山	太子西山	春日向山	山田高塚	植山	忍阪段ノ塚	山田上ノ山	車木ケンノウ	牽牛子塚	岩屋山	中尾山
		奈良最大の前方後円墳	最後の大型前方後円墳					最初の八角墳					
墳形	円墳（楕円）	前方後円	前方後円	前方後円	方墳	方墳	前方後円	八角墳	八角墳	円墳	八角墳	八角墳	八角墳
規模		310m	140m	93m									
御陵名	シナガノミササギ 磯長陵	畝傍陵墓参考地	ヒノクマノサガイノミササギ 檜隈坂合陵	コウチノシナガノナカノオノミ 河内磯長中尾陵	コウチノシナガノハラノミササギ 河内磯長原陵	シナガノヤマダノミササギ 磯長山田陵	国史跡	オシサカノウチノミササギ 押坂内陵	オオサカノシナガノミササギ 大阪磯長陵	オチノオカノエノミササギ 越智崗上陵	国史跡	国史跡	国史跡
宮内庁治定	聖徳太子		欽明	敏達	用明	推古		舒明	孝徳	斉明			
判定	○				○	○		○	○				
古墳の主	聖徳太子	欽明	敏達	石姫（欽明皇后）	用明	推古	空墓	舒明	孝徳	？	斉明	空墓	文武
代位		29	30		31	33		34	36		35, 37		
没年	621	571	585	572+α	587	628		641	654		661		
改葬		堅塩 ← 欽明と合葬	堅塩 ← 敏達	敏達	用命 ← 用命	推古 ← 竹田皇子と合葬	推古 ← 竹田皇子と合葬	舒明 ← 舒明			斉明	斉明	
					磐余'(磐余池上陵)から改葬			643年に飛鳥（滑谷岡陵：小山田古墳）から改葬					

＊32代：崇峻天皇

敏達陵（585没）が梅山古墳になるまで、14年間

（推古の改葬計画）

（591）石姫（欽明の皇后）陵：太子西山古墳に敏達を合葬

（593）同母兄：用明を磐余から太子西山古墳に改葬

（612）堅塩媛（皇后扱い）を檜隈大陵：欽明陵に合葬

（620）夫：敏達を檜隈陵：梅山古墳に改葬（大阪大学　髙橋照彦　説）

舒明天皇陵（日本書紀：641年に崩御、翌年、飛鳥・滑谷岡陵に埋葬）

滑谷岡（なめはざまのおか）陵（舒明天皇の初葬墓）＝小山田古墳か？

歴・文「馬見古墳の主を求めて」参加者名簿

５月１４日（火）　西大寺駅南口：８時３０分発（生駒交通マイクロバス）

番号	お名前	参加料	出欠確認	備考
1	川岸美子	３，２００円		事務局
2	川岸次郎	３，２００円		
3	松尾弘	３，２００円		
4	福田美伸	３，２００円		
5	冨井忠雄	３，２００円		
6	内河洋文	３，２００円		
7	青木幸子	３，２００円		
8	羽尻嵩	３，２００円		
9	冨江文雄	３，２００円		
10	森英雄	３，２００円		
11	小田進八郎	３，２００円		
12	池田　信明	３，２００円		
13	戸田博子	３，２００円		
14	阿部和生	３，２００円		
15	池田富子	３，２００円		
16	西谷範子	３，２００円		
17	上西千代子	３，２００円		
18	増田典男	３，２００円		
19	太田和則	３，２００円		
20	田矢恵造	３，２００円		
21	辻敏美	３，２００円		
22		３，２００円		
23		３，２００円		
24		３，２００円		
25		３，２００円		
26	坂東久平	３，２００円		担当世話人
27	古川祐司	３，２００円		担当世話人
28	中井弘	３，２００円		事務局
合計		８９，６００円		